神戸新聞NEXT

東京・中野の「レンガ坂」彩る、アートなシャッター　丹波市出身「光の情景画家」笹倉鉄平さんが演出

2025/6/26 17:30

社会　文化　丹波

「訪れた人がぬくもりを感じられる商店街になれたら」。笹倉鉄平さんの作品「カダケス２０１０」のシャッター前で思いを語る中…

石畳の坂道が続き、その両側に並ぶ店舗の幻想的なライトアップ。まるでヨーロッパの街中を歩いているような気分になる路地が東京都中野区にある。雰囲気を引き立てるのが、店のシャッターにあしらわれた丹波市出身の画家、笹倉鉄平さん（７０）の作品だ。「光の情景画家」と称されるぬくもりのある柔らかな色彩が、安らぎの空間を演出している。（名倉あかり）

■柔らかな色彩、安らぎの空間

ＪＲ中野駅南口にほど近い「中野レンガ坂」。砂利とアスファルトが混在するでこぼこ道に店主らがれんがを敷き、２００２年に命名した。約１００メートルの坂には現在、洋食店やスペインバル、バーなど約５０店舗が軒を連ねる。「おしゃれな飲み屋街」として地域住民らから愛されている。

これまでの道のりは平たんではなかった。中野レンガ坂商店会の岡田俊彦会長（６５）によると、約１０年前、中野駅周辺の再開発計画が持ち上がり、「商店街のにぎわいがなくなってしまうのでは」と危機感が広がった。レンガ坂の持ち味を磨くため、オリーブの木やれんが造りの泉を設置。スピーカーから洋楽を流すなど工夫を凝らしたという。

ただ、商店街には不動産や銀行の店舗もあり、曜日や時間帯によってはシャッターが閉まり、閉鎖感が出てしまう。悩んでいた岡田会長は、インターネットのサイトで笹倉さんの作品を見つけた。

欧州の夜の街で、ともる明かりに人や動物が集う情景を描いた優しい作風に引かれた。「これだ！」。早速、神奈川県で開かれた発表会に足を運び、笹倉さんに直接、「アートシャッター」への協力を依頼した。

笹倉さんは思いを受け止め、掲示場所のサイズや形、雰囲気に合うように自ら絵を選定。伸縮し、凹凸もあるシャッターに絵を写すのは容易ではなかったが、岡田会長は「思わず一つ一つに頬ずりしたくなるような仕上がり。お客さんの笑顔がすぐに浮かんだ」。

アートは１０カ所に施した。幅３メートルを超える大作もあり、間近で作品を眺めたり、写真を撮影したりする人も多い。昼と夜で商店街の違う顔を楽しめ、店が閉じた時間にしか出合えない景色があるのも魅力だ。

絵を公開した２０年秋は、新型コロナウイルス禍のさなか。飲食店は休業や時短営業を余儀なくされたが、絵が海外旅行に行けない住民や遅くまで働く医療従事者らの癒やしになればと、夜通し明かりをつけた。

コロナ禍を経て、今では「名所、デートスポットとして全国から人が来てくれるようになった」と岡田会長。「世界的に有名な笹倉さんが商店街に貢献してくれている。ぜひ兵庫の人にも訪れてほしい」と感謝の思いを口にした。

笹倉さんコメント

東京・中野の中野レンガ坂商店会の取り組みへの協力について笹倉鉄平さん（７０）が神戸新聞にコメントを寄せた。

◇

シャッターというなかなか手ごわい「キャンバス」に、プリントとはいえ絵を（施す）という変化球な依頼に興味を引かれ、すぐに現地へ視察に行きました。レンガ坂のたたずまいに、自分の絵の世界観と相通じるものを感じました。

「観（み）る人の気持ちを明るく照らす光」を描くことが自身の絵のテーマでもあります。ここを歩かれる方々が少しでも安らぎを感じ、店舗がお休みする時間帯にしか現れない「静」の世界に、少しでも彩りを添えられますように。

レンガ坂の皆さんの「いらっしゃる方々を楽しませたい！」という気概や、温かな歓迎の演出の一助となれましたら幸いです。